

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2025 年度
氏名	東谷 遥夏	指導教員 (主査)	高橋 稔教授

論文題目	自己概念の明確性と社会的比較が社交不安症状に及ぼす影響
------	-----------------------------

本文概要

【問題と目的】社交不安症（SAD）とは、他者によって注視されるかもしれない社交状況に関する著明または強烈的な恐怖または不安を特徴とする精神疾患である（American Psychiatric Association, 2022）。SAD の認知モデルでは、症状の維持要因の一つとして、自己に関する否定的な信念や思い込みなど、自己概念の歪みが寄与すると記述されている（Hackmann et al., 1998）。Stopa et al. (2010) は、SAD 者の自己概念の歪みに関して、自己に対する明確性が十分でないことが影響していると指摘している。自己概念の明確性とは、個人の自己概念（知覚された個人的属性など）の内容が、明確かつ自信を持って定義され、内的一貫性があり、時間的に安定している程度のことである（Campbell et al., 1996）。自己概念が不明確な場合、外部から得た情報に基づいて自己に関する判断を行う傾向が強く、外部の情報の中でも、特に自己と他者の比較を用いることが指摘されている（Butzer & Kuiper, 2006）。自己と他者を比較する傾向は「社会的比較」と呼ばれ、Festinger (1954) は、自分自身の意見や能力に確信が持てない時、中でも客観的な基準が欠けている時に、比較が行われると述べている。以上を踏まえると、自己概念が不明確な者においては、社会的比較が生じやすく、このことが SAD 症状を維持すると考えられる。本研究では、自己概念の明確性と社会的比較が SAD 症状に及ぼす影響について検討することを目的とした。

【方法】都内の私立大学に在籍する大学生 261 名を対象に、無記名式の質問紙調査を実施した。調査材料は(1)フェイスシート（年齢・性別・学年）、(2)SAD 症状：①Social Phobia Scale (SPS) 日本語版（金井他, 2004）、②Social Interaction Anxiety Scale (SIAS) 日本語版（金井他, 2004）、(3)邦訳版自己概念の明確性尺度（徳永・堀内, 2012）、(4)社会的比較：①社会的比較志向性尺度（外山, 2002）、②社会的比較を行う時の比較対象（高田, 1994 を一部改変）、③比較を行った結果の自分自身に対する評価（潮村・小市, 1999 の調査のうち、自己評価を尋ねる項目のみを使用）を用いた。なお、②および③については単項目に対して、選択式で回答を求めた。本調査は、目白大学人文社会科学系研究倫理審査委員会による承認を得て実施した(承認番号：24 人研-010)。

【結果と考察】社会的比較を行った際の自己評価を 3 群（ネガティブ・ポジティブ・0 評価）に分け、一要因分散分析を行った。その結果、ネガティブな自己評価群は自己概念の明確性が有意に低く、社会的比較の頻度、SPS および SIAS が有意に高かった。分散分析の結果を踏まえると、比較による自己評価は各変数と一次関数的な関係にないと考えられた。そのため、比較による自己評価を因果モデルから除外し、パス解析を行った。パス解析の結果、自己概念の明確性から社会的比較の頻度、比較対象の多様さに対して負の影響が見られた。また、社会的比較の頻度を介して SPS, SIAS に対して正の影響が見られ、SPS に対する影響の方が強かった。なお、自己概念の明確性から SPS, SIAS に対しては直接の負の効果も見られた。比較対象の多様さから SPS への影響は有意ではなかった。本研究の結果から、自己概念が明確であるほど SAD 症状が軽い傾向にあったため、自己概念の明確性を高める介入は、SAD 症状の低減を目的とした介入の一つとしても有効であることが示唆される。特に、SAD は若年層で発症する割合が高いため、青年期において自己概念の明確性を高める介入を行うことは、他者との比較によって生じる症状を含め、SAD の予防や発症リスクの低減に寄与することが期待される。今後は比較が生じる場面を具体的に設定し、比較の文脈や機能なども含め、より精緻な測定を行う必要がある。